

山操山高校のSGH課題研究発表会、2月には本校のSGH課題研究発表会でそれぞれ代表生徒が研究成果を発表した。これ以外にも、5月には倉敷で開催された「G7倉敷教育相会合」に参加、11月のSGH運営指導委員会では校外の有識者に研究発表などの経験をすることができた。

③ 平成29年度の取組

「GLOBALⅢ」選択者は女子6名であった。6名を2名ずつ3グループに分け、それぞれのグループを2～3名の教員が担当した。授業の主な進め方は前年度と同じであったが、一時期に大きな負担とならぬように、どの時期までに何をしなければならないか、スケジュールを年度当初に細かく明示し、計画的に研究を進めることを強く指導した。また、中間発表を前年度の9月から7月末に変更した。夏期休業前にそれまでの取組をまとめることで、休業中にすべきことが明確になると考えたからである。

前年度の反省から、授業開始前の春期休業中に研究のテーマを考え関係する書籍を2冊は読んでくるように指示した。そのため、4月には全員研究テーマが決まっていたうえに、中には既にフィールドワーク調査をしている生徒もおり、良いスタートができた。また、岡山大学に新設されたグローバル・ディスカバリー・プログラムの協力を得ることができ、5・7・11月に一人ひとりの研究について複数の大学教員からアドバイスを受けた。当然のことながら研究に行きづまることもあり、それを打開するために多くの生徒が積極的にフィールドワークやインタビューを何度も行うなどし、研究の深化が見られた。

6名の生徒の研究テーマは、それぞれ「『禅』に魅せられた外国人～曹源寺からひも解く禅の魅力」「リアルとSNS」「児童労働を改善するために」「岡山県におけるインバウンド政策の現状と課題」「ムスリムが過ごしやすい環境づくり～イメージ・対応充実度向上～」「日本の貧困問題に必要な『つながり』という視点」である。

「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2017『世界の人々と共に生きるために～私たちの考えること、出来ること～』」「NPO法人こくさいこどもフォーラム岡山高校生懸賞論文2017『グローバル社会と私』」にそれぞれ2名、「広島修道大学2017作文コンテスト『わたしのまちを世界とつなげる』」「第9回HBCエッセイコンテスト『私を変えた身近な異文化体験』(英文)」「生涯学習振興財団第19回高校生小論文コンクール『今こそ大志を語れ』」にそれぞれ1名が応募し、「NPO法人こくさいこどもフォーラム岡山高校生懸賞論文2017」では1名が最優秀賞、もう1名が奨励賞を受賞し、「広島修道大学2017作文コンテスト」では高校生応募総数411作品中2位に相当する優秀賞を受賞した。

年度末には岡山操山高校と岡山学芸館高校のSGH課題研究発表会、本校のSGH課題研究発表会でそれぞれ代表生徒が研究成果を発表した。これ以外にも、愛媛県立松山東高校が開催した「中四国SGH高校生会議」に3名が参加し、本校SGHの取組について発表するとともに他校の生徒と意見交換するなどの交流を行った。

④ 平成30年度の取組

「GLOBALⅢ」選択者は男子3名女子2名の計5名であった。5名を3グループに分け、それぞれのグループを2～3名の教員が担当し、前年度と同様に取組を進めた。特に、スケジュールを細かく明示することについては徹底した。5名の生徒の研究テーマは、それぞれ「多文化共生のまちを目指して～高校生世代からみた解決策～」「Okayama, a Popular Town-to-be」「日本の #ME TOO運動」「インクラゲによる土壌塩害の緩和は可能か～NaCl吸収能力の検証～」「人はいつ『ひらめく』のか?～創造性が発揮されやすい状況の分析～」であり、理系的なテーマに取り組んだ生徒がいたのが特徴である。応募したコンテストは「国際医療福祉大学『共に生きる社会』めざして 高校生作文コンテスト」「NPO法人こくさいこどもフォーラム岡山 高校生懸賞論文2018『SDGsと私』～17の持続可能な開発目標～」「全国英語教育研究団体連合会 全国高校生英作文コンテスト『A Society I Want to Be Realized』」「読売新聞社 日本学生科学賞」「神奈川

大学 全国高校生理科・科学論文大賞」であった。

年度末の岡山操山高校、岡山学芸館高校および本校のSGH課題研究発表会でそれぞれ代表生徒が研究成果を発表した。これ以外にも、7月に徳島県立城東高校が開催した「SGH発表会」に、11月に岡山県教育委員会主催「きらり輝け！高校生キャリア教育2018」に代表生徒が参加し、課題研究の成果を発表するとともに他校の生徒と意見交換するなどの交流を行った。

⑤ 取組についての考察と生徒の感想

「GLOBALⅢ」では、1年次の「GLOBALⅠ」と2年次の「GLOBALⅡ」で学んだことを活かして、さらに深い研究を進めることを目指したが、それは概ね達成できたといえる。自分が考えた研究テーマについて先行研究や参考文献を調査し、研究を進める中で研究方法や方針を改善し、現場を訪れてフィールドワークを行い、行政機関や専門家への問い合わせをし、アンケートや実験など、多くの手法が実施された。それらの結果を整理した上での考察は、経験を積んだ3年目らしい内容であったといえる。

3年間の取組で分かったことは、計画的に取り組みせることの大切さと、経験が生徒を成長させる大きな機会となることである。

対象生徒が3年次生ということもあり、研究に使うことができる時間には限りがあるので、考えられる調査や実験のうち実施するものと切り捨てるものを区別することが必要である。生徒は意欲的であればあるほどあれもこれもやろうとするので、指導者が上手にアドバイスをすることが必要である。そして、長期的なスケジュールを示しながら期限を区切った小さなステップを踏ませるべきである。平成30年度の例では、「5月に何を研究テーマにするかの発表」「7月末に中間発表」「9月初旬までに校外の論文コンテストへ応募」「11月初旬に最終発表の案作成」「11月末に最終発表」「12月中下旬にエッセイ提出」と区切って活動させることで、一時期に過度の負担となるのは防ぐことができた。

中間発表でも最終発表でも2日前に同じ形式でリハーサルをしたが、そこでの相互評価や指導者の助言を受け、当日にはスライドの内容や説明の量とスピードなどに大きな改善が見られた。また、校外で発表する機会に恵まれた生徒は、会を重ねるごとに余裕が生まれ、聴衆との会話を取り入れるなどの工夫もあった。自分以外の経験も貴重であり、2年次生の時に先輩の発表を聞いたことも研究の進め方や発表の仕方の大きな参考となっていた。研究テーマや論文のまとめ方について卒業生に相談していた生徒もいた。

最後に、「GLOBALⅢ」の授業を終えた後の生徒の感想を2名分載せておく。

・テーマがなかなか決まらなくて、研究の開始が遅くなってしまい、最初はどうなることかと思いましたが、なんとか上手くいって、無事最終発表まで終わることができ、よかったです。グローバルの授業で培った資料を探す力、人前でプレゼンテーションする力、レポートを作成する力、答えのない問題に取り組む力などは、今後、大学や社会に出た時に必ず必要となる力です。これらの力を高校の時点で得られるシステムを提供してくれる高校は少ないと思うので、そういった力が身につく嬉しく思います。今後も3年間のグローバルで培った力を活かして頑張っていきたいです。

・研究を進めていく上で一番に感じたことは、最初自分でイメージしていたことの通りにはスムーズに進行しないということだった。計画通りに事が動いたことは一回もなかった。だから、何よりも大切なのは、まずはアクションを起こしてみること。そうすることで、現状の自分の立ち位置が見えてくる。イメージと現実のギャップを埋めていくことができる。そうやって自分にできることを把握することが、研究でも勉強やその他のことでも大切だと学んだ。GLOBALⅢを通してやり遂げることの達成感はもちろんのこと、こういった教訓も学ぶことができた。

(4) 課題研究発表会

① 概要と目的

本発表会は、SGH指定前年度にあたる平成25年度より、毎年形式を変更しながら実施してきた。当初は「学類発表会」という名称で、2年次生からの人文社会学類、国際教養学類、音楽学類、理数学類という4つの学類における学びの成果を他の学類の生徒や1年次生に発表し、知を共有する取り組みとして実施していた。SGH指定初年度の2014年度には、名称を「学類発表会およびSGHポスターセッション発表会」に改め、2015年度以降は、さらに名称を「課題研究発表会」に改めて実施してきた。目的としては、①「GLOBAL I」、「GLOBAL II」の中で取り組んできた課題研究が、グローバルな視野と主体的・協力的な実践力を備えるための取組であることを、発表を通して再確認する、②その学習成果を1・2年次全員で共有することにより、学類や年次を超えて知的好奇心の高揚を図るとともに、次年度に向けた各学類の学習への意識付けの場とすることを掲げた。

② 内容の変遷

(a) 平成26年度「学類発表会およびSGHポスターセッション発表会」

- ・学類発表会 ～世界を広げよう～

学類研修のコンセプトを生かして、各学類での探究的な学びを発表した。

- ・ポスターセッション ～身近なところから世界を知ろう～

「GLOBAL I」の学習活動の紹介とその成果を発表した。

- ・海外体験発表会 ～世界に羽ばたこう～

海外文化研修、海外学類研修およびその他留学経験者の体験などを報告した。

- ・パネルディスカッション ステージは「世界」だ！ ～世界とつながろう～

海外体験発表会参加者をパネラー、外部講師をコーディネーターとした。

(b) 平成27年度「課題研究発表会」

- ・「GLOBAL II」ステージ発表

「GLOBAL II」の中で取り組んだ課題研究の成果を、事前にテーマ毎のグループで発表した。その中で選出された代表班が本発表会において、プレゼンテーション形式で発表した。

- ・「GLOBAL I」ポスターセッション

「GLOBAL I」A群、B群において取り組んだ課題研究の成果を、事前にクラスで発表した。その中で選出された代表班が、ポスターセッション形式で発表した。

(c) 平成28年度以降「課題研究発表会」

- ・「GLOBAL II」ステージ発表

- ・県内の他のSGH指定校によるステージ発表

平成28年度は岡山操山高等学校代表生徒、平成29年度は、それに加え岡山学芸館高等学校の代表者による研究成果の発表が行われた。

- ・「GLOBAL I」A群ポスターセッション及びB群・「GLOBAL II」プレゼンテーション

「GLOBAL I」B群の発表形式をプレゼンテーションに改めるとともに、「GLOBAL II」のステージ発表を行った班以外の代表班がプレゼンテーション形式で発表。

- ・「GLOBAL III」選択者による3年間の振り返り

「GLOBAL III」選択者のうちの代表者が、3年間の研究を振り返り、3年間の「GLOBAL」での学びの成果を発表した。平成29年度は代表者が研究発表も行った。

③ 成果

「GLOBAL」のカリキュラムが年次進行で完成していくのに伴い、本発表会もより発展的になってきた。各発表には、社会の諸問題を高校生の立場で当事者意識を持ってとらえ、改善を図ろうとする姿が見られ、また年次が上がるにつれて、文献調査だけでなく、現地調査やアンケートなどのフィールドワークを行った上での発表が増加した。発表後の質疑応答では、多くの生徒が挙手し、質問する積極的な姿勢が見られた。他校の発表も大きな刺激になったようだ。

(5) 海外修学研修

この研修は、本校がSGHの指定を受け、世界に活躍のステージを求めるという基本方針のもと、フィールドワークや日頃の学習成果の発表などの実践を通して、プレゼンテーション力、コミュニケーション力の伸展を図ることを目的に企画された。具体的には、2年次生が「GLOBAL II」での課題研究の成果をもとに、海外の大学や高校、国際機関で意見交換を行った。平成26年度は試行として、アメリカとイギリスの2方面に生徒を派遣したが、平成27年度の本格実施以降は各年度、選抜された10名の生徒（平成29年度のみ9名）をイギリスに派遣した。

① 研修の概要

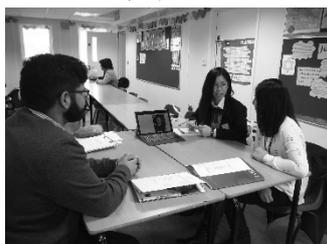
3月上旬より、8泊9日の日程を組み、プログラムは現地有名大学や現地高校、国際機関への訪問、また、ロンドン市内でのフィールドワークを含むものとした。校内での事前研修を8回程度実施し、研修の目的や心得、訪問地の一つである国際機関に関する予備知識の講義や、フィールドワークの計画、課題研究の成果を英語で発表する準備を行った。現地での研修は、Berkshire Collegeのキャンパスの一面にスタディ・センターを持つArdmore Language Schoolを拠点として行った。研修中はArdmoreのスタッフが、英語の指導やプレゼンテーションの支援など、熱心かつ丁寧に行ってくれた。

現地有名大学訪問として、オックスフォード大学やケンブリッジ大学を訪問した。現役の学生に、大学に入学した経緯や大学生活の様子、将来の展望について聞くことができた。現地高校訪問として、Cranford Community CollegeやBroxbourne Schoolを訪問した。課題研究の発表として、パワーポイントのスライドを見せながら英語で発表し、質疑応答まで行うことができた。国際機関への訪問としては国際海事機関やCommonwealth of Nationsを訪問した。ロンドン市内のフィールドワークでは、グループを組み、各々の興味に応じた訪問地を訪れた。引率者の手を借りずに、生徒だけの力で行動したことで自信につながったようだ。



② 参加生徒の成果（代表生徒報告から一部抜粋）

私は、今回の研修を通じて、自分は世界の中の一人なんだと再確認することができた。



グローバル・リーダーとは大げさなことではなく、自分を知り、日本を知り、世界を知って、社会に何か少しでも良いことをもたらす行動を起こすということだと思った。友人と長い時間一緒に過ごせたことで得られたものも多くあった。関わってくれた全ての人に感謝して、今回の経験を心に留め、自分を高め、他者と協同しながら、その核となれるような人材になりたい。

③ 課題

現地高校生を相手に課題研究の成果をプレゼンテーションで発表することが主要なプログラムの1つであるが、交流相手となる現地高校を確保するのが大変難しいと感じている。本校が独自で手配しているCranford Community Collegeの他にもう1校交流校があることが望ましかったが、平成28年度に交流することができたBroxbourne Schoolは、残念ながら平成29年度から校舎の改修工事に入ることによって、交流が途絶えてしまった。

現在、研修が生徒にとってさらに実り多いものになるように、今年度の研修へ向けて準備を進めているところである。

第3章 実施報告

第1節 「GLOBAL I」の実施

1. シラバス・年間指導計画の作成と共有

(1) 「GLOBAL I」の基本方針

科目「GLOBAL I」は、1年次生全員を対象として、「グローバルな社会や経済等について基礎的な知識を身につけるとともに、探究や発表の方法・内容について学び、探究型学習の基礎的技能を身につける」といった目標のもと、3単位で実施した。情報収集の手法や情報機器の取扱いを学習し、探究型学習やプレゼンテーションの実践を通じて、課題研究を進めていくための基礎的な技術の習得を図る。

基礎的な事項を学習した後は、生徒が協力しながら共通の課題について情報を収集し、解決策を研究する機会を2回設定し、教員はその活動の支援をすることを基本的な方針とした。

(2) 生徒の現状と「GLOBAL I」の方向性

情報化が急速に進む中で、情報を収集したり、発信したりといった能力は高く、授業においてもインターネットを使い、調べることについては対応できている。一方で、収集した情報の正誤の判断や、著作権の理解は乏しく、正しい引用はできていない。また、収集した情報から課題を見出したり、分析結果をきちんと表現したりする能力にも課題が見られた。技術的な点では、発表するためのプレゼンテーションソフトや、文書作成ソフト、表計算ソフトの使用に関して、生徒個々の能力や経験の差が大きかった。

そこで、「GLOBAL I 情報」では、情報の正誤の判断や、著作権の理解を高めるような指導を多く取り入れるとともに、生徒個々の能力差も勘案しながら、内容によっては、複数の教材を準備するなどして対応をした。

課題研究においては、探究型学習やプレゼンテーションを実践する時間を多く取り入れて、生徒同士が協力し、議論を重ねる中で、スーパーグローバルハイスクールとして身に付けさせたい思考力、判断力、表現力やチーム力等の育成が図られるよう工夫した。

「GLOBAL I」は、2年次に実施する「GLOBAL II」につなげていく基礎づくりではあるが、グローバルな課題についての理解を深めたり、探究型学習の基礎を身につけたりすることができるように、国際社会で活躍する人や、課題研究の専門家からの講演などを計画し、実施することとした。

年度の前半は、ポスター作成に必要な操作を習得させ、集めたデータをグラフ化して提示するための演習を行った。また、プレゼンテーションソフトを使用して相手に情報を適切に伝えるための方法を学習させた。それらと平行して、インターネット上の情報の信憑性の判断などを行わせ、著作権について深く学習させた。

年度の後半では、身近な生活の中の課題をテーマにした課題研究A群と、地理的背景や歴史的過程の中で発生した課題を研究テーマにした課題研究B群を実施する。課題研究を通じて、自分達と社会との関わりや、世界との繋がりを理解させるとともに、自分達が国際社会の形成者であることを自覚させる。そして、視野を世界に広げさせ、グローバルな意識を高める。課題研究の成果はポスターセッション形式、プレゼンテーション形式で発表させ、相手にわかりやすく表現することの大切さを理解させる。

研究を進めるにあたり、岡山大学の大学院生・学生の4人に、ティーチング・アシスタント(TA)として協力を依頼し、情報収集の仕方・レポートの作成方法・プレゼンテーション資料の作成・プレゼンテーションの方法などについて、指導を仰いだ。

学科名	学類名	年次
普通科	全学類	1年次

科目名 (校内科目名)	単位数	講座数	生徒数	種別	履修形態	指導者名(時間数)	
GLOBAL I (GLOBAL I)	3	9	360	選択		宇高洋志(9) 野上寛子(7) 高山弥生(2) 各が担当(9) 馬場雅洋 次田元文、島田昌郎(各3)	
教科用図書(発行所)			教科書以外の教材(発行所)				
単元名	学習のねらい	学習内容	配当時間	観点別学習到達目標			
				関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
情報の収集とプレゼンテーションの基礎	情報をまとめ、わかりやすく表現する技能を身につける 探究活動の基礎を経験する プレゼンテーションの基礎を知り経験する	<ul style="list-style-type: none"> 相手に伝わりやすい情報の表現方法を学ぶ 視覚的資料作成の技術 適切な情報を収集する能力 探究的活動の基礎 プレゼンテーションの基礎 	18	インターネットの特徴について意欲的に理解する	モラルを守った行動がどのような行動か判断できる	コンピュータの基本用途を利用することができる	コンピュータの基礎を理解する
			10	コンピュータのソフトウェアの機能について興味を持つ	伝えたいものを分かりやすく表現するための機能を選ぶことができる	その場面に応じた適切なソフトウェアを利用し、分かりやすく表現できる	インターネットの特徴を理解する
			11	問題解決について関心を持つ			ソフトウェアの機能にどのようなものがあるか理解する
チーム力と世界的な課題の基礎	チーム力の重要性を体験し、「進取・協同」を実践する 世界的な課題の理解	<ul style="list-style-type: none"> クラスづくりやチーム作りとその実践 現在の世界情勢を意識させる 	25	自ら学び自ら考える意欲を持つ 自らを律しつつ他人とともに協調しようとする	個と集団の関係について適切に判断することができる 世界的な課題について高校生としていかに関わるかを考えることができる	自分の意見を論理的に述べることができる 他人の意見を冷静に受け止めることができる 膨大な情報から信頼できるものを選択することができる	分担して作業することや、その結果について話し合うことの有用性を理解する 複雑な現代社会の状況を理解する 地球全体に共通な課題について理解する
			14	世界の出来事や課題に関心を持つ			
探究的学習	探究や発表の方法・内容について学び、探究型学習の基礎的技能を身につける	<ul style="list-style-type: none"> 身近な生活の中の課題について 世界の国々が発展してきた地理的背景や歴史的過程の中で発生した課題について 	22	問題解決について関心を持つ	問題解決のために理論的な思考ができる	問題解決を行うために今まで学習した内容を使うことができる	理論的な問題解決の手法を理解する
			17	主体的に目的達成のための行動をとることができる	目的達成のためにどのような行動が必要か考えることができる	自分の意見を人に分かりやすく伝えることができる	自分の意見を持つことの大切さを理解する
総時間数		117					

平成30年度 教科 「GLOBAL」 年間指導計画

岡山県立岡山城東高等学校

学 科 名	学 類 名	年 次
普 通 科	全 学 類	1 年 次

科 目 名 (校内科目名)	単位数	講 座 数	生徒数	種別	履 修 形態等	指 導 者 名 (時間数)
GLOBAL I (GLOBAL I)	3	9	360	選択		宇高洋志(9) 野上寛子(7) 高山弥生(2) 各クラス担任(9) 馬場雅洋 次田元文、島田昌郎 (各3)
単元名 題材名	事 項 名 (教 材 名)	時 数	形 態	指 導 内 容		指 導 上 の 留 意 点、教材等
情報の 収集と プレゼン テーション の基礎	情報をまとめ、わかりやすく表現する技能	18		<ul style="list-style-type: none"> ・伝わりやすい情報の表現方法 ・視覚的資料作成の技術 ・適切な情報を収集する能力 		<ul style="list-style-type: none"> ・文書処理ソフト、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトを活用しつつ、「箇条書きとしてまとめる」「図形化する」「レイアウトの工夫」など、相手に伝わりやすい情報の表現方法を学ぶ ・信頼できる情報かどうかの判断に注意させ、2次情報は加工されたものであることを意識させる ・コピーペーストでなく、自分の意見を持ち、その検証の重要性を理解させる ・聞き取りやすい話し方を工夫し、受け取り手の状況に合わせて話すことの大切さを理解させる
	探究活動の基礎	10		<ul style="list-style-type: none"> ・探究的活動の基礎 		
	プレゼンテーションの基礎	11		<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーションの基礎 		
チーム 力の大切さの 体験と 世界的な課題 の基礎	チーム力と進取・協同	25		<ul style="list-style-type: none"> ・クラスづくりやチーム作りとその実践 		<ul style="list-style-type: none"> ・集団討論、弁論大会などの機会を活用する ・上級生の経験を参考にさせる ・集団宿泊研修、学園祭などに前向きに関わらせる ・外部講師を積極的に活用する ・科目「現代社会」との連携を図る
	世界的な課題の理解	14		<ul style="list-style-type: none"> ・現在の世界情勢を意識させる 		
探究的 学習	身近な生活の中の課題について	22	グループ 学習	<ul style="list-style-type: none"> ・人間の生活の営みを総合的に捉え、社会との関わりについて理解し世界とつながっていることに気づかせる ・自らが国際社会の形成者であることの自覚を促し、視野を世界に広げさせる 		<ul style="list-style-type: none"> ・現状を理解した上で、解決策を探究し、他の発表を聞き、意見交換をすることで、主体的に学ぶことの楽しさや成就感を味わえるように配慮する ・学習の成果をポスターやプレゼンテーションソフトで発表させる
	世界の国々が発展してきた地理的背景や歴史的過程の中で発生した課題について	17				
	時 数 計	117				
備 考	単位数は3であるが、4月～9月は週に2時間、10月～3月は週に4時間の授業を実施する。					

2. 実施概要

(1) 前期

4月から10月の第3回定期考査までを前期とし、週2時間実施した。1時間は年次全体が一斉に実施する時間として火曜7限を設定し、もう1時間は「GLOBAL I (情報)」として、情報収集とプレゼンテーションの基礎を学ぶことを目的とした授業をコンピュータ室で行った。

「GLOBAL I」火曜7限 (週1時間)		「GLOBAL I (情報)」 (週1時間)
4月	進取協同の実践①(宿泊研修準備) 進取協同の実践②(宿泊研修準備) 進取協同の実践③(宿泊研修準備)	■ コンピュータの基本操作 コピー 貼付 ファイル名変更 ファイルのフォルダ間移動 データの保存方法 拡張子の意味 ■ Word 演習 フォントサイズ・色・種類の変更 図形・写真の挿入と加工 レイアウトの設定 ポスター作成 ■ Excel 演習 グラフ作成 グラフエリアの書式設定 ■ PowerPoint 演習 デザイン・レイアウトの設定 フォントサイズ・色・種類の変更 図形・写真の挿入と加工 見づらいスライドの修正・改良
5月	G I オリエンテーション (校長講話) 進取協同の実践④(宿泊研修事後指導)	
6月	SGH 講演会① 大阪・神戸アメリカ総領事館 総領事 Joseph Freeman 氏 クラス討議 (学校生活を考える) 進取協同の実践⑤(翠緑祭準備) 進取協同の実践⑥(翠緑祭準備)	
7月	SGH 講演会② (AMDA) ※1 中止 進取協同の実践⑦(翠緑祭準備)	
8月	進取協同の実践⑧(翠緑祭準備)	
9月	進取協同の実践⑨(翠緑祭準備) ※2 中止 SGH 講演会③ 岡山理科大学 教職・学芸員センター長 岡本弥彦 氏 進取協同の実践⑩(翠緑祭反省)	

※1 西日本豪雨の影響により中止

※2 臨時休業日 (台風21号により暴風警報発令)

(2) 後期

第3回定期考査後の10月17日から後期とし、週4時間実施した。前期と同様に週1時間は火曜7限を年次全体が一斉に実施する時間とし、残り3時間で課題研究に取り組んだ。2月6日の課題研究発表会では、A群 (ポスター)・B群 (PowerPoint) それぞれ1班ずつが各クラス代表として発表に臨んだ。

「GLOBAL I」火曜7限 (週1時間)		課題研究 (週3時間)
10月	SGH 講演会④ 榊学研アソシエ 波多野洋司 氏 課題研究 A 群	10月17日～11月30日 〔課題研究 A 群〕 身近な生活の中から課題を設定する
11月	課題研究 A 群 課題研究 A 群 課題研究 B 群オリエンテーション	
12月	SGH 講演会⑤ 株式会社トミヤコーポレーション 代表取締役会長 岡山経済同友会常任理事 古市大蔵 氏 GPS-Academic テスト	12月10日～2月20日 〔課題研究 B 群〕 世界の国々の地理的・歴史的背景の中で発生した課題に取り組む
1月	課題研究 B 群 課題研究 B 群	
2月	課題研究 B 群 課題研究発表会 GLOBAL I まとめ	

3. 課題研究（A 群）

（1）SGH 構想調書より

課題研究 A 群の条件は次のように定められている。

1. 重点目標

人間の生涯にわたる生活の営みを総合的にとらえ、社会との関わりについて理解し、地域と世界が繋がっていることを気付かせるとともに、探究型学習を体験することに重点を置く。

2. ねらい

身近な生活の中の課題について、現状を理解した上で、その解決策を探究したり、他の発表を聞き、意見交換を行ったりすることで、主体的に学ぶことの楽しさや成就感を体得できる学習の場とする。

3. 研究テーマ

「生活と環境」 「共生社会と福祉」 「男女の平等と相互の協力」
「環境とエネルギー」 「教育と地域社会」

4. 方法

- ① 5人程度でチームを編成し、課題研究に取り組む。
 - ・研究期間は10月17日（水）～11月22日（木）とする。
 - ・10月17日以降、「家庭基礎」（週2）は「GLOBAL I」となり、「GLOBAL I（情報）」（週1）と合わせて週3時間（45分×3）で研究を進める。
- ② 研究成果はポスターセッション形式で発表する。
 - ・11月26日（月）からクラスごとに元「家庭基礎」の時間帯90分で発表会を行う。

（2）平成30年度の実施概要

① 班編成

各クラスとも男女混合5名×8班に編成し、班ごとに家庭科の8分野を割り当てた。これは、研究テーマに沿った問いを設定する際、視点を分散させるためである。

1班（女4・男1）家族 2班（女3・男2）保育 3班（女3・男2）高齢者
4班（女3・男2）食生活 5班（女4・男1）衣生活 6班（女3・男2）住生活
7班（女3・男2）経済 8班（女3・男2）または（女4・男1）環境

② 指導計画

	講義・説明	生徒の活動
1週目	・研究とは ・論文(レポート)の構成	研究分野の理解 先行研究の検索 リサーチクエスチョンの設定
2～3週目	・多面的検討と仮説設定 ・ポスターセッションとは	研究計画作成 調査・研究
4～5週目	・ポスター作成の手順 ・ポスターセッション要項	調査・研究 ポスター・レポート作成
6週目	ポスターセッション（前半45分：ポスター掲示と練習 後半45分：本番）	

③ 事前学習

昨年度と同様に A 群の期間が 1 週間短縮されるため、「家庭基礎」の時間を活用した事前学習を計画したが、西日本豪雨や台風による臨時休業が影響し、予定していた時間数が確保できなかった。A 群開始までに、Excel や Google Scholar を一度は体験させ、さらに今年はマンダラートやロジックツリーも紹介したいと考えていた。しかし授業数減となったためこれらは断念し、昨年より事前指導が不足したまま A 群開始を迎えることになった。

④ 問いの設定

構想調書のテーマとの関連性がやや希薄であっても、世界レベルの問題解決でなくとも許容し、生徒自身が疑問に思ったことで、しかも2週間程度で解決できそうな問いであることを優先させている。次に示すのは、生徒が設定した問いの一部である。

【生活と環境】

- ・岡山県の小中学校で行う効果的な避難訓練とは
- ・衣服のリユースを推進するためにフリーマーケットサイトの活性化が必要ではないか
- ・避難所で乳幼児の子を持つ母親のストレス軽減のために高校生ができることは何か
- ・バランスのよい食事を毎日とることは幸せにつながるのか

【共生社会と福祉】

- ・次世代を担う高校生は少子化の抑制に貢献しようと思っているのか
- ・子どもの貧困対策として、子ども食堂は今後増やしていくべきか
- ・乳幼児を公共の場に連れて行くのは遠慮すべきか
- ・学校社会においてLGBTの生徒の負担を軽くするために何が出来るか
- ・高齢者のゴミ出し負担を軽減させる方法は何か
- ・積極的安楽死は最後に誰が手を下すべきか

【男女の平等と相互の協力】

- ・共働きの夫婦の家事分担は50:50にすべきか
- ・災害や事故現場において「女性や子どもを先に」というのは男女差別か
- ・若者世代で割り勘が多いのは、男女とも他人にお金を払いたくないからではないか
- ・離婚や別居で家を出て行くのはなぜ妻の方なのか

【環境とエネルギー】

- ・電気自動車はガソリン車以上に普及しないのか

【教育と地域社会】

- ・保育施設で思いやりや命の大切さを学ばせるために動物飼育は必要なのか
- ・小学校から英語4技能を学習すべきか

(3) 成果

「課題研究A群の成果と課題」として生徒が記述したのを見ると、思考力に関連する気づきが多数見受けられた。目に見えて上達したパソコン操作や、班で1つの目標に向かって分担作業したことよりも、批判的思考(critical thinking)という彼らにとっては新しい概念が印象に残ったようである。

- ・以前はグラフや表を見たときに、その情報の傾向だけで判断していたが、「どこからの情報なのか」「一部の情報ではないか」「グラフの解釈は適切か」などと考えられるようになった。
- ・成果としては、反論の反論を使うことで説得力が増し、よりよい主張になることが分かったこと。これからは、今まで当然だと思っていたことをもっと疑問に思い、新発見する力を身に付けたいと思った。
- ・探究活動の中で、自分が考えて正しいと思っていたことでも、他の人から逆の指摘をされることがたくさんあった。自分の中の常識にとらわれすぎずに、周りはどう感じているのか意識しないといけないと感じた。
- ・主張が矛盾していないか、どういうデータが必要なのかと自分で作ったものを批判的に検討する力がついたと思う。ただ、調べることが多すぎてまとめきれない部分があった。
- ・質的なデータを得るため、休日や部活の時間を削ってインタビューに行くことができた。依頼を何度もするのは大変だったが、120%の力を尽くしたと思う。
- ・グラフの作り方や出典の書き方を初めて知った。CiNiiで先行研究を調べる方法や、まとめサイトの情報はそのまま論文に使うことができないことを初めて知った。
- ・今まで人の前に立つのが苦手だったが、ポスターセッションでは元気にはきはきと発表することができた。結論へのだめ出しが多かったので、説得力のある結論の書き方を身に付けたい。

4. 課題研究（B群）

（1）研究における目標

現代世界への理解を深める中で、論理的にものごとを考察し検証する技能を身に付けるとともに、効果的に人へ伝える技能の習得を図る。

また、来年度からの「GLOBAL II」に向けての準備として、自己の研究における能力の向上と協同の精神に磨きをかけ、研究グループが自立して研究活動を行う力とその態度を身に付ける。

（2）研究領域

	共通テーマ	個別テーマ
世界史分野	【世界発見 日本の中で世界を見つける。 世界の中で日本を見つける。】	世界と日本との関わり グローバル化と「モノ」
日本史分野		岡山と世界との関わり 海外文化・技術との接点
地理分野		環境問題と貿易 生活・文化 観光・文化

（3）重点目標

- ① 過去・現在・未来という時間軸と日本・他国という空間軸を結びつけ研究を展開する。
- ② 論理的にものごとを考察するために、根拠の裏付けをもって検証を行う。
- ③ プレゼンテーションソフトによる、わかりやすい表示と表現方法を身につける。
- ④ 研究活動によって、充実感を得る。

（4）内容

- ① 第4回定期考査終了後【12月10日から第5回定期考査まで】の「GLOBAL I」では、B群として地理歴史に関わる研究を行う。
- ② 2年次に選択をする地歴A科目に関わる内容での研究を行う。
※人文社会・国際教養学類で、パッケージ2（地歴B2科目選択型）を選択した生徒は、世界史以外の選択科目のグループに属して研究を行う。
- ③ 研究グループは、クラスごとの各科目選択者のなかで、原則4～6名によって構成するものとする。

32期生

	1組		2組		3組		4組		5組		6組		7組		8組		9組		全体	
	人数	班数	人数	班数																
世界史A	23	5	25	6	16	3	24	5	20	4	24	5	25	5	17	3	26	5	200	41
日本史A	16	3	11	2	16	3	12	3	13	3	10	2	9	2	15	3	5	1	107	22
地理A	0	0	4	1	8	2	4	1	7	2	6	1	6	1	8	2	9	2	52	12
合計	39	8	40	9	40	8	40	9	40	9	40	8	40	8	40	8	40	8	359	75

※上記の表は、研究分野別人数（1組地理A選択者は2名のため日本史A選択者と合同で実施）

- ④ 各研究グループは、指定された科目のテーマに沿って研究活動を行う。
※各分野のテーマの中から選択をして研究活動を行う。

- ⑤ 1月下旬から2月上旬にかけて各クラスにおいて各研究グループによるプレゼンテーション発表をパワーポイントによって行う。(1班8分の発表・質疑応答、プレゼンのシートは6枚とする。)
- ⑥ 研究集録用資料として、パワーポイントデータ(6枚)と研究概要(A4用紙1枚)を2月20日までに提出する。

(5) 評価方法

- | | | |
|--|---|--------------------|
| <p>① 研究に関わり提出されたレポートの内容</p> <p>② プレゼンテーションの発表の様子</p> <p>③ 日々の取り組みと研究に対する姿勢</p> | } | 左記の項目を総合的に判断し評価する。 |
|--|---|--------------------|

(6) B群の具体的なテーマ

世界の10地域(東アジア、東南アジア、南アジア、西アジア、アフリカ、ヨーロッパ、ロシア、北アメリカ、南アメリカ、オセアニア)のいずれかの地域と日本との関係や差異について調べ、考察する。

世界史分野	
テーマ(分野)	テーマの概要
世界と日本との関わり	<p>【日本と世界の過去・現在・未来について理解考察を深める】 日本と世界の1地域との歴史的関連性をしらべ、現在にいたる国際関係の特徴を知った上で、将来の関係のあり方を考察する。</p> <p>(具体的な取り組み)</p> <ol style="list-style-type: none"> 世界を10地域(東アジア、東南アジア、南アジア、西アジア、アフリカ、ヨーロッパ、ロシア、北アメリカ、南アメリカ、オセアニア)に分ける。 1の10地域と日本との関係性を<u>歴史的に調査する</u>。その際、<u>その地域全体ではなく、個別の国との関係性に</u>着目して、<u>2国間の関わり</u>に調査を絞るのが望ましい。(例:日韓、日英) 2国間の関わりを<u>歴史的にまとめることに重点をおく</u>。そして、今後の2国間の良好な関係に必要なことを提起する。例えば、問題があれば、その問題の解決に向けた現状と課題、自分たちが考える方法を提起する。また、現在において良好な関係であれば、そのような関係がどのような要因から実現できたのかを探る。 それぞれのグループの発表を通じて、世界と日本の関わりの多様性を理解する。 <p>【この取り組みを通じて得ることを期待される能力について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自国(日本)との関わりから出発することで、調査対象とする国との親和性を自らに構築する。 ・他国に対する複眼的な視点で関係性を理解する姿勢を持つ。<u>歴史的に両国の関係を調べる</u>ことで、日本と調査対象国との現在の関係が永続的に続いてきたのではなく、それぞれの時代で関係性が変化していることに気付けるようにする。
グローバル化と「モノ」	<p>【グローバルに関わる「モノ」の歴史をしらべ、人類に与えた影響と今後の展望を考察する】</p> <p>(具体的な取り組み)</p> <ol style="list-style-type: none"> グローバル化とはどのように定義できるか、以降の作業の基準となる「グローバル化」について共通の定義を作る。 グローバル化に関わると考えられる「モノ」を選び(ただし19世紀以降を対象とする)、

	<p>選んだ理由について現状を踏まえて説明した上で、以下の内容を明らかにする。</p> <p>① 誕生から現在までの歴史</p> <p>② 人類に与えた影響</p> <p>3. 各グループでまとめられた「モノ」の発表を通じて、各自が描く世界のより良き未来像を構築する。</p> <p>【この取り組みを通じて得ることを期待される能力について】</p> <p>・ある特定の対象を歴史的に考察することを通じて、現代世界の成り立ちへの理解を深め、未来世界のグランドデザインを構想していくための基礎力を培う。</p>
--	---

日本史分野	
テーマ(分野)	テーマの概要
岡山県と世界とのつながりを考察する。	<p>【古代～近現代にわたる岡山の歴史上の事象について、海外の文化・技術との接点を調べ、その特徴や意義を考察する。】</p> <p>(具体的取り組み)</p> <p>1 岡山県の歴史上の事象として、海外文化・技術と関係が深いものについて調べる。</p> <p>2 古代・中世・近世・近代・現代の各時代における特徴的な事象をとりあげる。 キーワード：稲作・金属器・古墳文化・渡来人・仏教・貿易・朝鮮通信使・洋学・幕末・キリスト教・社会運動・戦争・歴史上の人物 など</p> <p>3 これらの考察を通して、海外との接点を探り、岡山の地域的特徴を明らかにする。 <具体例> 稲作の遺跡・鉄生産の遺跡・古墳文化・県内の渡来系の人々・仏教・遣唐使・東アジア文化圏・朝鮮通信使と岡山藩・洋学と岡山・幕末の岡山藩・自由民権運動・社会運動・キリスト教と岡山の教育・実業家・芸術家 など</p>

地理分野	
テーマ(分野)	テーマの概要
環境問題と貿易	<p>【中国あるいはアメリカの小麦生産推移から、日本や世界の食糧問題を考察する。】</p> <p>中国あるいはアメリカの小麦生産推移の統計資料をもとに、生産量変化の原因を考察し、その根拠を明らかにする。そして、この原因によって引き起こされる経済的な変化を貿易面から捉え、日本との関係性についても考慮しつつ統計データや資料などを駆使して国際関係を考察する。</p> <p>キーワード：貿易風・湧昇流・農耕・降水量・干ばつ・多雨・暖冬・小麦の生産 ・小麦の輸入・小麦価格 など</p>
生活・文化	<p>【発展途上国における経済成長による食生活の変化が世界に及ぼす影響について考察する。】</p> <p>かつての日本や現在の途上国の変化を例にその特徴を理解した上で、発展途上国における食の欧米化によって起こる問題点を取り上げ、その問題についての解決に向けた考察を行う。日本の立場を含めて統計データや資料などを駆使して論を展開する。</p> <p>キーワード：肉の消費・飼料作物・トウモロコシの生産・トウモロコシの貿易・肉牛の生産</p>

	バイオエタノール・熱帯雨林 など
観光・文化	<p>【日本の外国人観光客の増加の要因とこれからの日本の観光の発展に向けて考察する。】 訪日観光客数の統計データをもとに、その推移と地域の特徴から、日本における外国人観光客の特徴やその変遷についてを考察する。また、こうした現状の中で、日本の観光を活性化するために何をすべきなのかを統計データや資料などを駆使して考察する。</p> <p>キーワード：円高・航空路線・経済成長・中国・自然環境・歴史伝統文化・近代文化・主要な観光地域・観光国 など</p>

(7) B群の取り組みの成果と反省

・昨年度までの反省を踏まえて

先行研究の検討が不十分であったり、参考文献をあげずにインターネットのHPを切り貼りするだけでレポートを作成している点を改善するために、事前の全体説明会で必ず先行研究（書籍・論文・前年度までの研究成果）に目を通し、参考文献として掲載することを周知徹底した。また、提出時の「書式」にこだわらせることで、次年度「GLOBAL II」を実施する上で必要となる研究上の「作法」を生徒が習得できることを目指した。

・班分けについて

「GLOBAL I」B群は地歴A科目の1単位の振替として実施しているため、2年次に履修を希望している地歴A科目をもとに編成した。一方で生徒からは、将来受験にも使用し、比較的得意意識のあるB科目の分野で研究をしたかったという声もあがっている。生徒の興味・関心の観点から検討することも必要であると感じた。昨年度の反省にもかかわらず改善できなかった。

・班別テーマ設定と研究指導について

班ごとに個別テーマを設定し、研究を進めていくためには基本的な地理歴史・公民分野の知識が不可欠である。現状では、中学校での社会科や、1年次の現代社会で学んだ内容がそのベースとなっている。生徒は、限られた時間の中で工夫しつつよく努力しているが、1年次での実施のため、筋道立った意見を表明する上で前提となる社会事象の知識・理解が不足していることがあることも否めない。質の高い研究を進めるために、必要となるこうした基本的な知識をどのように身に付けさせつつ指導していくかが今後の課題と考える。

5. 講演会

(1) 目的

世界的課題の現状やグローバルな社会、経済等についての基礎的な知識を身につけるとともに、グローバル人材として必要とされる資質等の涵養を図る。

(2) 実施内容

目的に基づき、年5回の講演会を予定していた。しかし本年度は、第2回目の講演会が西日本豪雨の影響ため中止となった。実施された講演会については、ただ話を聞くだけでなく、毎回記録シートを作成し、それを「GLOBAL I」専用の個人ファイルに保管することで、随時、振り返りができるようにするとともに、課題研究に生かせるようにした。

具体的な講演会の内容は次のとおりである。

①第1回

期日 平成30年6月1日

講師 Joseph Freeman 氏 大阪・神戸アメリカ総領事館 領事

演題 “The Benefits and Challenges of Studying Abroad”
「海外留学の利点と海外留学のチャレンジ」

概要 講師ご自身の留学体験を交えながら、留学には留学先の言語や国および文化をより理解することができるなどのメリットがあることを話された。また、今や世界の共通語となっている英語を学習することの重要性を述べられた。なお、この講演会は質疑応答を含めてすべて英語で行われた。



②第2回

期日 平成30年7月10日

講師 岩本 智子 氏 AMDA

演題 「国際理解と課題」

概要 西日本豪雨の影響により第2回考査の日程が変更されたことおよび、岩本氏ご自身が援助活動に派遣されたため、本講演会は中止となった。

③第3回

期日 平成30年9月18日

講師 岡本 弥彦 氏 岡山理科大学 教職・学芸員センター長

演題 「課題研究の進め方」

概要 課題研究を進めていく上で重要なことは、「本質を見抜く力」、「未来像を予測して計画する力」、「多面的、総合的に考える力」などの習得した知識や技能を活用する力や、「コミュニケーションを行う力」、「他者と協力する力」などの集団で交流する力、「自他のつながりを尊重して行動する力」、「主体的に参加する力」などの自律的に活動する力が必要であることを述べられた。また探究のプロセ

スについて具体的な実践例を示しながら説明された。



④第4回

期日 平成30年10月26日

講師 波多野 洋司 氏 株式会社 学研アソシエ 学力開発事業部

演題 「小論文とは何か」

概要

2021年より実施される、大学入試センター試験に代わる大学入学共通テストでは、「思考力」、「判断力」、「表現力」が重視される方向であり、これらの対策として、今後、小論文学習が重要であるということと、小論文は単に入試だけでなく、社会のあらゆる場面で必要になると述べられた。そして実際に小論文で問われる力として、「理解力」、「分析する力」、「考える力」、「表現力」が重要であると話された。さらに、小論文の基本構成について説明があり、課題文型小論文では課題文の要約が重要であると話された。そして最後に、社会問題に対して関心を持ち、様々な現象や課題に対して広く全体を見渡した状況で考察する視点、いわゆる「鳥の目」と、同じ現象や課題に対して局所的、現実的な立場で考察する視点、いわゆる「虫の目」の両方が必要であると述べられた。

⑤第5回

期日 平成30年12月14日

講師 古市 大藏 氏 株式会社 トミヤコーポレーション 代表取締役会長

演題 「グローバル人材になるために」

概要

講師ご自身が多くの国を渡り歩き、グローバルに活躍された経験や岡山の街づくりに向けた功績をもとに、グローバル人材になるためには、①地元のことを知ること、②既成概念にとらわれないこと、③語学力を付けること、④コミュニケーション力を高めること、⑤多様性を理解すること、⑥変化への対応力を付けること、⑦自ら成長していく努力を惜しまない持久力をもつこと、の7つの能力が必要であるということをお話された。そして、高校時代の経験やハングリー精神をもって努力することの重要性を述べられた。



第2節「GLOBAL II」の実施

1. シラバス・年間指導計画の作成と共有

(1) 「GLOBAL II」の基本的方針

「GLOBAL II」においては、岡山大学や地域経済界等と連携して課題解決に向けた研究を行うことで、学問的・探究的に学ぶ態度を養い、グローバルな視野と主体的・協力的な実践力の涵養をねらいとする。

このねらいを実現するため、次のような基本方針を作成した。

「GLOBAL I」で経験した探究型課題研究をより深めるため、岡山大学の教員や経済界等と連携し、専門的な立場から研究テーマについて歴史的背景や文化的背景を含む指導や助言を受ける。また、ティーチング・アシスタント（以下TA）として6名の岡山大学大学院生・大学生から、イングリッシュ・ティーチャー（以下ET）として2名の外国人講師からの協力を得、より深い研究活動を目指す。また、2年次では生徒が4学類に分かれることから、各学類の得意分野を生かしつつ、互いを補完し合いながらひとつの探究型課題研究を完成させる「異力の統合」を目指す。プレゼンテーション能力を高めるために、10月にグループ毎の中間発表、1月にはグループ毎の研究発表会を行い、その結果をもとに選抜された代表班が2月のSGH課題研究発表会で発表する。

(2) 「GLOBAL II」の方向性

「GLOBAL I」で学んだ技術や手法をもとに、より発展的な探究型学習を展開する。

「経済・産業」「国際貢献」「環境・安全」「教育・文化」の研究領域を設け、それぞれ2つずつ合計8つの大きな研究テーマを設定する。生徒はそこから自分の興味・関心のあるテーマを選択し、6人程度の班でグループ研究を行う。班編成では異なる学類の生徒同士が同じ班に入るように工夫し、各自の得意分野を生かして研究に参加し、多角的な視点で研究内容の充実を図る。このことにより、個としての力を集結し協同で物事に取り組む姿勢とコミュニケーション能力を育成し、「異力の統合」を図る。

それぞれの研究テーマ毎に8名の岡山大学教員に年3回、6名の大学・大学院生と2名の外国人講師に毎時間の指導を受け、研究内容の深化を図る。6～10月に実施する学類研修や、韓国の金海外国語高校生の本校訪問行事などでの異文化交流が研究を深めるための機会となるよう、意見交換の場を設ける。英語による研究や発表を考える班には、外国人講師から集中的な指導を受けることができる体制を整え、語学力に対する意識を高めさせる。研究過程で情報収集が必要となった場合には、企業や公的機関等の訪問も含め、積極的にフィールドワークをするように勧める。中間発表を含め何度か予定している発表会では、発表者としてのプレゼンテーション能力とともに、聴衆も研究内容を共有し質疑応答によってその内容を深化させ聴衆としての聞く能力を高める機会と捉える。

(3) 教員間の方針の共有

SGH事業としては最終年度となった今年度は、教職員全員が今までの取組の総まとめというつもりで取り組んだ。指導する2年次団の教員も初年度の経験者が一巡し二度目となる者も多く、スムーズに取り組めた。基本方針や方向性は変わらず、設定した8つのテーマも昨年と変更していないので、前年度の研究内容を土台として発展させることが可能であることを共通認識として持ち生徒にも促すことができた。今年度も資料収集においては、書籍や論文など信頼性の高い情報源を利用するよう指導し、フィールドワークやアンケート調査等、生徒の積極的な活動を促していく方針である。年度当初には、一年間を見通した具体的な計画と年度末に作成させるべき研究成果物の確認をした。